

## ダンヌンツィオの言語崇拜

——マンゾーニおよびカルドゥッチとの関係を通して——

内 田 健 一

### 要 旨

ダンヌンツィオの言葉は、マンゾーニ派の目指した「日常的」なものと全く異なる、とりわけ「文学的」なものであった。にもかかわらず、彼の言葉は社会に大きな影響を与え、低劣な「ダンヌンツィオ主義」を生み出した。そこで本稿では、彼の言葉の実像を、彼自身の証言を通時的に検討することによって、彼の人生との関わりも含めて明らかにする。

1888年の記事〈ジャウフレ・リュデル〉で、カルドゥッチの散文における言葉の音楽性と語源の探求を賞讃するが、実はそれらはダンヌンツィオ自身の理想に他ならない（第1章）。1889年の小説『快楽』では、「詩こそ全て」と言葉の全能性を認め、トスカーナ語の伝統への愛着を表明する（第2章）。1894年の小説『死の勝利』の献辞で、ダンヌンツィオは自らを言葉の冒険者として描き、イタリアの威信を高める言葉の創出を目指す（第3章）。1895年の小説『岩窟の乙女たち』において、言葉と民族主義の深い結び付きを示す。ここで言葉は虚構の道具ではなく現実的な「武器」と見なされる（第4章）。1900年の講演〈ダンテの神殿〉でダンヌンツィオは、カルドゥッチに代わる「詩聖」として、言語の崇拜を司る（第5章）。同じ1900年の小説『火』で、作品という虚構の中ではあるが、理想的に芸術と人生が一致する。詩人の言葉は、英雄の身振りと同じように、「行為」と見なされる（第6章）。1903年の詩篇『マイア』では、「民族の神話的な力」として讃えられる言葉を用いて、詩人は新しい時代の訪れを告げる（第7章）。1906年の『散文選集』の出版の経緯から、ダンヌンツィオの言葉に対する誠実さが窺われる。その「前書き」には言葉の「師匠」としての自負が表れる（第8章）。1913年の伝記『コーラ・ディ・リエンツォの人生』の献辞では、クルスカ学会を揶揄しつつ、言葉の「精華」を追求する自らの姿を描く（第9章）。『鉄槌の火花』の一つ、1924年の随筆『ルクレティア・ブーティの第二の愛人』では、寄宿学校の日々を回想する中で、トスカーナ語への執着とマンゾーニ派への反感を語る（第10章）。1935年の自叙伝『秘密の本』で、年老いたダンヌンツィオは言葉を「交流」ではなく「表現」の手段と考える。そして彼の言葉と人生は神秘的な合一に達する（第11章）。

ダンヌンツィオにとって、はじめカルドゥッチは言葉だけではなく新しい自由の指導者でもあったが、次第に束縛となる。1907年の師匠の死によって解放されたダンヌンツィオは、劇場と戦場で本当の自分らしい人生を追求する。そこで彼は自らの生命のリズムに言葉を合わせることによって、より広く深い自由の世界を表現することができた。

キーワード：イタリア語、ナショナリズム、クルスカ学会、トスカーナ語、神秘主義

### 序

ダンヌンツィオの言葉を論じるにあたって、まず念頭に置かなければならないのは、それがマンゾーニ派の目指した「日常的用法 (uso)」<sup>1)</sup> から懸け離れているということである。それ

を示すように、言語学者 Coletti が文学に特化せず、簡潔（125 ページ）にまとめた「イタリア語の歴史」（『イタリアの社会と文化の歴史』所収、1988 年）で、マンゾーニの名前は頻出するが、ダンヌンツィオの名前は数回だけしか現れない<sup>2)</sup>。一方、同じ著者の 500 ページに及ぶ『文学的イタリア語の歴史』（1993 年）では、マンゾーニの散文に 7 ページ、韻文に 4 ページ、ダンヌンツィオの散文に 5 ページ、韻文に 7 ページが割り当てられている<sup>3)</sup>。

このように「文学的」な言葉を作り上げるにあたって、ダンヌンツィオは当時の「詩聖(vate)」カルドゥッチ（1835-1907）をモデルにした。「詩聖」とは共同体の代表として、日常的ではない高尚な言葉を用いながら、祭典を司る存在である。古典主義のカルドゥッチはマンゾーニ派に対して批判的で、トスカーナ州とその都フィレンツェがイタリア語の理想郷であることを認めず、詩『サン・グイード礼拝堂の前にて（*Davanti a San Guido*）』（『新韻（*Rime nuove*）』所収、1887 年）で、「愚か者たちのマンゾーニ主義（*manzonismo de gli stenterelli*）の中の／トスカーナ語はとても間抜けだ」（GC: 395）と罵った。

ダンヌンツィオの言葉は著しく文学的であったにも関わらず、広く同時代の社会に多大な影響を与えた。1939 年、彼の死の翌年に、言語学者 Migliorini（1990: 275）は講演「ガブリエレ・ダンヌンツィオとイタリア語」で次のように述べる。

この非常に繊細で貴族的な芸術の技法が、どのようにして一般に普及し得るだろうか？ 残念ながら劣化してしまう。無声映画の幾つかの字幕の低劣なダンヌンツィオ主義（*dannunzianesimo*）をご存知だろうか？ そして現在、ある小説の中に「若い異教の神のように美しい」主人公を見付ける時、ある記事で「爽やかで頼もしい若人たち——我らの民の精華（*fiore*）——の行進」と読む時、サッカーの試合の報告で語彙と文体のダンヌンツィオ主義を見付ける時、私たちは気分を害する。低質な模倣の煩わしさが原作にも反響するのではないかという懸念は不当なものではない。

このように彼の言葉は、特殊でありながら一般的な成功を収めたゆえに、誤解や曲解をされることが多かった。そこで本稿では、彼の追求した言葉の実像がどのようなものであったのかを、彼自身の証言を通時的に検討することによって、彼の人生との関わりの中で明らかにする。

## 第1章 カルドゥッチの散文——言葉の音楽性、語源の探求

1888 年 4 月 9 日、ジャーナリストとして修業を積んでいた 25 歳のダンヌンツィオは、『トリブーナ（*La Tribuna*）』紙に〈ジャウフレ・リュデル（*Giaufre Rudel*）〉という記事を載せた。これは、12 世紀プロヴァンスの吟遊詩人リュデルをテーマに、カルドゥッチがローマで行っ

たイタリア王妃臨席の講演の報告である。そこでダンヌンツィオはカルドゥッチの散文を詳細に分析するが、実はそれはダンヌンツィオ自身の理想の言葉の表明でもある。

散文において真の散文作家でありながら、カルドゥッチは自分の韻文を基にして、場面転換の動的効果と軽快さだけでなく、細かい構成と巧みな組み立てを行った。彼は散文においても極めて有能な設計者である。彼の文章の全てを見てみなさい。各部のバランスは完璧で、細部までしっかりと作り込まれている。文章の一つ一つは均整のとれた有機体で、自立しており、水晶の塊のように固く規則正しく並んでいる。(SG I: 1118)

注目すべき点は散文と韻文の密接な関連、つまり音楽性の重視で、後のダンヌンツィオの散文の顕著な特色となる。それ以外は「水晶」の修辞を含めて抽象的な表現が多く、特に目新しいところはない。とはいえ、この記事はダンヌンツィオにとって重要で、『散文選集 (*Prose scelte*)』(1906年)の「前書き (*Avvertimento*)」に引用される(第8章参照)。

続けてダンヌンツィオは、過去の散文作家(アンニーバレ・カーロ、フィレンツォーラ、マキャヴェッリ)とカルドゥッチの類似を指摘した後、その語彙について、「特有の効果を得るために、語源を遡ることによって、彼が幾つかの言葉に与える意味も決して恣意的ではない。言葉というものは同義語の可能性がない記号であって、ただその起源を探索することができるような作家にのみ十全な輝きを見せてくれる」(SG I: 1119)と述べる。ここでの語源、つまり言葉の本来の意味への言及は重要である。なぜならダンヌンツィオにとって語源の探求は、民族の本来の姿、アイデンティティーの探求と重なり合い、彼の創作活動の根本に関わってくるからである。

## 第2章 『快樂』——詩の全能性、トスカーナ語の伝統

1889年、ジャーナリストの経験をもとに、満を持して発表した初の長編小説『快樂 (*Il piacere*)』でも、やはり言葉について論じる。舞台は同時代のローマ、主人公のスペレリは青年貴族で、ダンヌンツィオの一種の「分身」である。

ある同時代の詩人の格言的な半行が、彼にはとりわけ好ましく思われた。「詩こそ全て。(Il Verso è tutto.)」

詩こそ全て。自然を模倣する際、いかなる芸術の技法よりも詩の方が、生き生きとして、軽やかで、鋭く、変化に富み、多様で、しなやかで、従順で、繊細で、忠実である。大理石よりも緻密で、臘よりも柔軟で、液体よりも精妙で、弦よりも響き、宝石よりも輝き、花よりも芳しく、剣よりも鋭利で、若芽よりも弾力があり、ささやきよりも心地よ

く、雷鳴よりも怖ろしい。詩こそ全て、詩には全てが可能だ。(Rom. I: 145)

「ある同時代の詩人」とは、実はダンヌンツィオ自身で、1887年10月16日の《ファンフルラ日曜版 (*Fanfulla della Domenica*)》誌に載せた『ソネッティ (ジョヴァンニ・マッラーディに捧げる)』の末尾に、「おお詩人よ、言葉は神聖だ。／純粋な美の中に、天は託した／我々の全ての喜びを。詩こそ全て。」(*Versi* I: 454) とある<sup>4)</sup>。「言葉」、そしてそれを繋ぎ合せた「詩」を、まるで人生そのものであるかのように彼は特別視する。それは「詩こそ全て」というフレーズを、3回繰り返すことにも表れている。ここでダンヌンツィオは然るべき方法、つまり言葉を尽くして「言葉」を讀んでいると言えるだろう。

完璧な詩は絶対的で、変更不可能で、不滅である。その中に言葉をダイヤモンドの結合力で保持し、いかなる力も破壊することができない精密な円のように思想を閉じ込め、あらゆる束縛と支配から自由になる。もはや作者には属さず、宇宙や、光や、内在的で永遠のもののように、全ての人のものであり、誰のものでもない。完璧な詩の中に正確に表現された思想は、言葉の暗い深淵で既に前もって形成されていた思想である。それは詩人によって引き出され、人々の意識の中に存在し続ける。(Rom. I: 145-6)

まず「不滅」や「永遠」など、神と同じように詩が形容されていることに気付く。ところが興味深いことに、詩人が神のように「思想」を創造するのではなく、「既に前もって形成されていた思想」を見付けるだけである。このような観念論的な態度を、これ以降もダンヌンツィオは取り続けることになる。その具体的な行動の一つが、辞書や古い書籍の中から言葉を取り出すこと、つまり語源の探求と考えられる。

彼にとって詩作は無からの創造ではなく、何らかの模範を必要とする。その具体例として、「ほとんどいつもトスカーナの古い作詩者たち […] ラーボ・ジャンニ、カヴァルカンティ、チーノ、ペトラルカ、ロレンツォ・デ・メディチ」(Rom. I: 146) を挙げる。初めの3人はダンテ(1265-1321)の友人で、ペトラルカはそれより一世代ほど若く、ロレンツォは15世紀後半に生きた。全員イタリア文学の伝統の本流に位置する詩人で、彼らのトスカーナ語が後に標準イタリア語のモデルとなった。ダンヌンツィオの理想とする詩と言葉は、至ってオーソドックスなものであると言える。

### 第3章 『死の勝利』の献辞——言葉の冒険者、イタリアの威信を高める言葉

1894年の長編小説『死の勝利 (*Trionfo della morte*)』の冒頭に付された画家ミケッティへの献辞で、新たに重要な言語論が展開される(なお、本章で紹介する部分は、第1章の記事

〈ジャウフレ・リュデル〉と同様に、第8章の『散文選集』の「前書き」に引用されることとなる）。ダンヌンツィオは自分の目標を、「美と詩の作品、イメージと音楽が豊かで、造形的かつ交響的な散文 […] 近代的な叙述と描写の散文」(*Rom.* I: 640) と簡潔に述べた後、イタリアにおける文学の現状を批判する。

我が国の作家のほとんどは、叙述や描写の際に、我々の生彩に富んだ語彙を全く見落として、数百の平凡な言葉しか使わない。したがって、我々の語彙の乏しさや見苦しさを咎める人も中にはいる。多くの人によって用いられている単語は、正確ではなく、精密ではなく、源泉が不純で、色褪せ、変形している。卑俗な用法によって、本来の意味が奪われたり、歪められたりした単語は、別の物事や逆の物事を表現することとなる。そしてこれらの単語は、ほとんど常に同じ調子の文の中に、上手く連結されずに並べられる。そこには全くリズムが欠けており、イメージを描こうとする物事の理想的な動きと何も対応していない。(*Rom.* I: 640-1)

彼が念頭に置いていたのは、マンゾーニ派やヴェルガを中心とする真実主義の作家たちだろう。庶民の生活を描く彼らの飾り気のない文体は、格調高いカルドゥッチの古典主義の対極に位置する。この引用部の内容は、語彙についても構文についても、第1章のカルドゥッチに関する記事の裏返しである。ここで注目すべき点は、単語の「源泉」や「本来の意味」へのこだわりで、次の段落にその説明がある。

我々の言葉は、逆に、それを知ろうと内側に入り込んで丹念に調べる熱心な芸術家にとって、喜びであり力である。何世紀もの間にゆっくりと積み重ねられた宝は、少し欠け落ちては常に新しくなり、あるものは表皮だけが知られ、またあるものは深奥の全てが隠されている。それらは未だ知られていない驚きに満ちており、極限の探究者を陶醉させるだろう。(*Rom.* I: 641)

文学者の話のはずが、まるで未開の土地で新種の生物を探す冒険者のようである。冒険はダンヌンツィオにとって最も重要なテーマで、それは言葉にも当てはまる。しかし、このような特殊な喜びを、どれだけの人が共有できるだろうか？ 果たしてこのように「文学的」な言葉が、どれだけイタリアという国に役立つのであろうか？

マンゾーニが国家統一の道具としてのイタリア語を、余計な部分の省略によって作ろうとしたのと正反対である。とはいえ、ダンヌンツィオにとって言葉はナショナリズムと不可分であり、「イタリア語は他のヨーロッパの言葉に対して、羨望を抱くことも、借用を請うことも、全くしなくてよい」(*Rom.* I: 641) と述べる。マンゾーニと違ってダンヌンツィオは、イタリ

アという国を作ることの次の段階、つまりその威信を高めることを目指す。よって彼の理想の言葉は、最先端の科学と芸術に対応するものでなければならない。

最近のイタリアの小説家がこの科学に傾倒している様子から分かるように、心理学者たちはとりわけその内省を表現するために、比類なく豊富な語彙を持っている。それは、感情や、思考や、更には抑圧し難い夢の、最も微かな束の間の波動を、グラフのような精密さでページに書き留めるのに適している。それと同時に彼らは、この極めて正確な記号と合わせて、とても多様でとても効果的な音楽的要素を持っているので、現代人の心に音楽だけが伝え得るものを伝える際に、ワグナーの大管弦楽団と競うことができる。(Rom. I: 641-2)

一般的に科学と芸術は相容れないものだが、それらをイタリア語は兼ね備えることが可能だと、ダンヌンツィオは言うのである。あらゆるものを吸収、同化しようとする彼の思想の特色が、ここに顕著に表れている。

#### 第4章 『岩窟の乙女たち』——言葉と民族主義の一致、「武器」としての言葉

小説『岩窟の乙女たち (Le vergini delle rocce)』は、1895年1月創刊の雑誌《コンヴィート (Il Convito)》に、6カ月にわたって連載された。この雑誌は当時の政財界のスキャンダルに対する芸術家たちの不満から生まれたものであり、ダンヌンツィオの小説にもそれが色濃く反映している。作者の「分身」と見なされる主人公カンテルモは、作品冒頭で次のように独白する。

しかし時には、私の本質のまさに根源——祖先たちの不滅の魂が眠っている場所——から、突如として非常に激しい勢いでエネルギーが噴き出した。とはいえ政治が低俗と無恥の惨めな見世物に他ならない時代において、それらが無駄であることを認識した私は悲嘆に暮れた。「もちろん素晴らしい」と、神霊が私に言った、「このように古い未開の力が、お前の中で清純に保持されていることは。それらは場違いとはいえ、今でも美しい。別の時代なら、お前のような人間に相応しい任務を、お前はそれのおかげで引き受けることになるだろう。その任務とは、確かな目標を指し示し、そこへ追従者たちを導くことだ。しかし、そのような日は遠いようなので、今のところお前は、その力を凝縮して、生き生きとした詩にすることを目指せ。」(Rom. II: 19)

「祖先」への言及は、民族を重視する彼のナショナリズムに由来する。この温故知新の態度は、

面白いことに、語源を尊ぶ彼の言語観にも当てはまる。このようにして政治と文学が繋がるのであるが、「今のところ […] 詩にすることを目指せ」という一節では、政治の方が本来の目的で、文学はその代替のように扱われている。

とはいえ、ダンヌンツィオはやはり芸術家であって、たとえ政治的な主張においても、具体的、現実的な内容が示されることはない。

彼らが脅かす思想と、彼らが冒瀆する美を守れ！ いつか彼らが本を燃やし、像を碎き、画布を破ろうとする日が来るだろう。お前たちの師匠の古い自由の作品と、お前たちの弟子の未来のそれを、酔った奴隷の蹂躪から守れ。人数が少なくても絶望するな。お前たちはこの世で最高の知と最高の力、つまり言葉を使いこなす。言葉の配列は殺傷能力において化学式に勝ることができる。断固として、破壊には破壊をもって立ち向かえ！（*Rom.* II: 29）

彼のエリート主義的な「思想」は「自由」を掲げること以外は漠然としているし、「美」はもともと主観的で曖昧なものと言わざるを得ない。しかし、精神的な「知」と肉体的な「力」を宿す「言葉」の価値は、後にダンヌンツィオが第一次大戦やフィウーメ占領（1919-20年）で果たす役割を考えると、簡単に否定できない。彼にとって言葉は虚構を生み出すだけでなく、現実を変える威力を有する「武器」となっていく。

彼の将来の目標は、カンテルモと祖先との想像の対話の中で示される。

したがって、お前の任務は三つから成る。詩の才能に恵まれ、言葉の技芸を会得しようと努めているのだから、お前の任務は三つから成る。正しい方法を用いてお前自身をラテン人の完全無欠の姿へ導くこと。お前の精神の最も純粋な本質を集め、お前の最も深遠な世界観をただ一つの至高の芸術作品の中に再現すること。お前の民族の豊かな理想とお前自身が獲得したものを一人の子孫の中に保存すること。（*Rom.* II: 40-1）

大前提として「言葉」があり、その後、倫理的、美的そして生物的な方法で、理想を追求しようと言うのである。これを実現不可能な絵空事と批判するのは容易いが、ダンヌンツィオの意図は憚ることのない大言壮語そのものにあると考えられる。

## 第5章 〈ダンテの神殿〉——新しい「詩聖」、言語の崇拜

1900年1月9日、ダンヌンツィオはフィレンツェのオルサンミケーレ聖堂で、連続ダンテ講義（*Lecturae Dantis*）のオープニングを飾る講演を行った。その内容は1900年1月14日

の《ジョルノ (*Il Giornno*)》紙に〈ダンテの神殿 (*Il tempio di Dante*)〉という題で掲載された。なお、これは第8章の『散文選集』に「新しいダンテ崇拜のためにフィレンツェの古い小麦倉庫を捧げることについて (*Per la dedicazione dell'antica loggia fiorentina del grano al novo culto di Dante*)」と改題されて載ることとなる。

この講演はイタリア・ダンテ協会 (1888年にフィレンツェで設立) の主催で、もとはカルドゥッチが行うはずだったが病気になったため、ダンヌンツィオに依頼が舞い込んできた。講演の冒頭でカルドゥッチのことを、「今日の母なる言葉の中で聞こえる最も高貴で清純な声」(SG II: 473) と表現し、「イタリアのこの栄光に満ちた神聖な言葉を、偉大なる父 [ダンテ・] アッリギエーリと同様に、完全無欠の愛で愛し続ける」(SG II: 473) と讃えるものの、胸中では新しい「詩聖」の襲名披露と考えていたことは間違いない。「詩聖」を頂点とする文学者という存在について、次のように述べる。

文学の市民生活における尊厳、言葉の芸術家にとって今日ふさわしい真の地位を、我々は認める。もはや勤勉な文明の些細な装飾ではなく、市民の筆頭、民族によって生み出された意識の最高のもの、時代の証人、代弁者、伝令と見なされている。(SG II: 474)

既に『岩窟の乙女たち』で示した、そして次の小説『火』でも示すだろう、「虚構」の中の文学者像を、ダンヌンツィオは「現実」の講演でも全く同じよう示す。そして言葉の力を、ダンテを通じて「崇拜」する。例えば、ダンテの言葉を小麦の種にたとえて、「ダンテはパンのように民族の活力を永続させるのに役立つ」(SG II: 475) と述べる。あるいは、ダンテを山、海、森にたとえて、「毎日我々に予期せぬ姿を見せ、毎日我々にすばやく真実を伝える」(SG II: 475) と述べる。更に『ヨハネによる福音書』の冒頭を想起させながら、次のように述べる。

彼は過去の全てと未来の全てに住む。彼について「始まりにいた、終わりにいるだろう」と言うことができる。我々の民族がその能力を取り戻すために従うべき律法を、彼の歌は見事に表現している。美しきイタリアの失われた姿を探し出す時、我々の助けとなるのは彼だけだろう。(SG II: 475)

これらの叙述は、歴史上のダンテ本人から全くかけ離れているように思われる。しかし、ここでダンヌンツィオが言おうとしたのは、ダンテによって作り上げられたイタリア語が、イタリアという国とその民族にとって欠かすことができないということである。彼のナショナリズムと言語との結び付きは、このようにしてますます強くなる。

## 第6章 『火』——芸術と人生の一致、「行為」としての言葉

1900年2月、壮大な柘榴小説三部作という計画の第1部として、小説『火 (*Il fuoco*)』が出版された。第2部『人間の勝利 (*La vittoria dell'uomo*)』、第3部『生の勝利 (*Trionfo della vita*)』は、粗筋も決まっていたが、遂に書かれることはなかった。しかし、『火』で既に、主人公のステーリオ（やはり作者の「分身」）の「勝利」は描かれている。彼はヴェネツィアの総督宮でのイタリア王妃臨席の講演で、「ただ一つ、この世界では詩だけが真実なのだから、それを観想し、思想の力によって自分の方にそれを引き寄せることができる者は、人生の勝利の秘密をまさに知らんとする者である」(*Rom.* II: 237-8)と自らの信念を述べる。一方で、彼は詩を完全に会得した者として、次のように描写される。

彼は自分の中で芸術と人生を固い絆で結び付け、自分の本質の奥底に調和を生み出す久遠の泉を見出すに至った。[...]特別な言語能力に恵まれた彼は、最も複雑な感性の作用も、瞬間的に自分の言葉に置き換えることができた。それは非常に精確で明瞭だったので、表現された途端に、もう彼のものではないように思われることもあった。(*Rom.* II: 205-6)

彼の目的は、詩つまり言葉によって現実と虚構を一致させること、あるいは現実と虚構を逆転させることと言う方が適切かもしれない。第2章の「詩こそ全て」が、『火』という作品の虚構の中ではあるが、一応の完成に至ったのである。

ここまでダンヌンツィオは言葉の力に対する信念を貫き、これ以降の人生の困難な状況においても、より深遠な方法で貫き通すことになる。次の一節はそれを予感させる。

したがって、群衆の中には美が秘められており、そこから詩人と英雄だけが閃きを解き放つことができる。劇場、広場、塹壕に響く突然の喚声によって、その美が明らかになるとき、詩、演説、剣の合図によってそれを引き起こした者の心は喜びの奔流に膨らむ。群衆に伝えられる詩人の言葉は、英雄の身振りと同じく、行為に他ならない。(*Rom.* II: 297-8)

詩人と英雄の同一視は『岩窟の乙女たち』からの流れであり、群衆との「劇場」での対峙は数年前から行っている女優ドゥーゼとの演劇活動で経験している。そして1899年の政治的悲劇『栄光 (*La gloria*)』には、同時代の「広場」での民衆暴動を描き込んでいる。ただ、「塹壕」については、確かに1896年にアフリカ遠征軍のアドゥアの敗北があったものの、やはり第一次大戦を予言するものと感じないわけにはいかない。ダンヌンツィオにとって恐ろしいまでのエネルギーの放出こそが「美」であり、そこで「言葉」は「行為」となるのである。

## 第7章 『マイア』——言葉の讃歌、近代社会の未来を告げる言葉

1903年、全7巻を予定する（実際には5巻で終わった）遠大な詩篇集『空と海と陸と英雄の讃歌 (*Laudi del cielo del mare della terra e degli eroi*)』の第1巻として『マイア (*Maia*)』が出版された。その大半は8400行の『生ノ讃歌 (*Laus vitae*)』によって占められる。ギリシア、ローマの古代と現代を行き来しながら、人間の運命と「私 (ダンヌンツィオ自身)」の成長を高らかに歌い上げるという内容は、前章の柘榴小説の未完の第2部『人間の勝利』、第3部『生の勝利』が流入していると考えられる。詩篇の末尾は「不滅の母への祈り (*Pregghiera alla Madre immortale*)」と題する自然の生命の讃美で締め括られ、それに先行して「師匠への挨拶 (*Saluto al Maestro*)」と題するカルドゥッチへの一種の献辞が置かれ、更にその前の部分に「言葉」が登場する。

おお言葉たちよ、仕事では／勤勉で、戦闘では勇猛な／民族の神話的な力よ、／時代の移り変わりの中で／お前たちは永遠の音節と化した。／黒ずんだ潰瘍でただれた／唇と、老人の不明瞭な／発音によって汚れた言葉たちよ、／おおイタリアの言の葉たちよ、／私はお前たちを光り輝く／本来の姿に戻すことができた！／／私が清く逞しい手で／原初の深淵から取り出した／新鮮なお前たちは、／まるで新しい光を浴びて／得も言われぬ彩りを見せる／海底の生物たちのようだ。／私がお前たちを芸術的に／並べると、その生命は／秘密の根源、無数の／繊維を明らかにして、／一つの民族すべてを／高鳴る自然に結び合わせる。(Versi II: 240-1)

ダンヌンツィオにとって言葉とは「力」であり、それは民族が寄り立つ「神話」のように本源的なものである。イタリア語が「永遠」なのは、ダンテによって完成の域に達した言葉を、後代の人々が使い続けるからだだろう。長い歴史の中で、様々な理由(特に同時代の政財界の汚職)によって「汚れた」としても、それを「本来の姿に戻すことができた！」とダンヌンツィオは自負する。そして彼にとって重要なのは「原初の深淵」、つまり語源である。未知の「生物」を探すかのようにして見付けた言葉を、「芸術」の作品にすることこそが、美の国イタリアへの最大の寄与になると彼は考える。

輝け、鳴り響け、言葉たちよ、／私の新しい歌の長大な／前奏となるこの讃歌の中で。／私はお前たちを新しく、／人間の本質、生身の／体、私の肉体の肉、／流れる血と涙へと変化させた。／川を育む高山の／上に輝く夜明けのように輝け、／そこから第十のミューズ、エウレートリアが／伝令のもとへ降りてくる。／竜巻のように響け、／それは彼方の灼熱の砂の中に／崩れゆく謎めいたスフィンクスを／葬り去った。(Versi II: 241)

『讃歌』全7巻の「前奏」の役割を担う『マイア』には、このような「言葉」の讃歌も含まれる。言葉が肉になるというのは、まさに『ヨハネによる福音書』の冒頭であり、新しい神の時代の訪れを暗示する。文明が発展する近代社会の中で、従来9人のミューズ（学芸の女神）に、ダンヌンツィオは10人目の「発明の女神」を付け足す。そして、かつて「謎」とされていた多くの事柄が明らかにされ、時代が進んでいく。彼にとって未来は、言葉を介して、過去を知り尽くした先に開けてくるものなのである。

## 第8章 『散文選集』——言葉に対する誠実さ、言葉の「師匠」としての自負

1906年、ダンヌンツィオは彼自身の編集による『散文選集』をトレヴェス社から出版した。この試みに彼を促したのは、2年前にザニケッリ社から出版されたカルドゥッチ自選の『散文集 (Prose)』だろう。出版社の意向は「学生用」だったが、1905年9月27日の社主宛ての手紙で、ダンヌンツィオはそれを断固として拒否する。

評論文である『ジオルジョーネ (Giorgione)』の中の、「悦楽 (voluttà)」「肉体 (carne)」「娼婦 (meretrice)」という言葉が君が追放するのは、過剰な検閲だ […]

だから読者には誠実な (sincero) 選集を提供し、大臣による推薦はおそらく無理なので諦める必要がある。

若者たちはお墨付きがなくても、おそらく本を買うだろう。(LT: 285)

ここには、まず閉鎖的な社会通念に対して反逆し、自由を求めるという彼らしい態度が見られる。それと同時に、言葉を「同義語の可能性がない記号」(第1章参照)と考える彼の、言葉に対する強いこだわりが感じられる。彼の作品は一般的にスキャンダラスと考えられているが、実は「誠実な」表現を求めた結果だったのではないだろうか。彼の貪欲な創作スタイルも、実は冷静な判断に裏付けられており、10月18日の手紙で、「この選集が学校用に作られたのではなく、公然と若者たちに勧めるのは重大な誤りだということを、友よ、納得してくれ。学校用には、教育的な意図に基づいて、特別な本を書くことが望ましい」(LT: 287)と社主に伝える。更に10月25日には、「50年後、私は教育者と見なされることを確信している。現在は、風紀の紊乱者と見なされることに甘んじている。／ […] 私の文学に対する廉潔 (probità) が、去勢を拒んでいる。笑い事ではなく、私は狼から羊に変身できない。逆に、今まで以上に狼になるつもりだ」(LT: 288)と、言葉に関して「誠実さ」を貫徹する。

この時点で既に、ダンヌンツィオは自らを「教育者」と考えていた。『散文選集』の「前書き」は、「編集者」という署名があるものの、実はダンヌンツィオが書き、その中で自らを「師匠 (maestro)」(PS: 3)と呼ぶ。そして「前書き」の末尾にも、文学者としての自信が満ち溢

れている。

多くの変形と腐敗のただ中で、言語の崇拜 (il culto della Lingua), つまり全ての時代において、民族の最も大切な宝、本来の高貴さの最も優れた証拠、精神的な自由と支配の感情のこの上ない指標と見なされたものを敬いそして守ることを、長年にわたって他のごく少数の人々と共に続けてきた努力が、新しくなった国民の意識によって評価されることを期待して当然である。(PS: 8)

この言語的ナショナリズムは、第5章の〈ダンテの神殿〉に由来するものであり、その文章は『散文選集』に含まれている。また、これはダンヌンツィオの「師匠」であるカルドゥッチの位置付けに関わることで、第1章のカルドゥッチに関する記事が、『散文選集』の「前書き」に引用されている<sup>5)</sup>。ここまで彼の芸術家としての活動を支えてきたのは、「崇拜」と呼ぶに相応しい、言葉への強い愛ということが分かる。

## 第9章 『コーラ・ディ・リエンツォの人生』の献辞 ——クルスカ学会に対する揶揄、言葉の「精華」の追求

1913年、伝記『コーラ・ディ・リエンツォの人生 (La vita di Cola di Rienzo)』がトレヴェス社から刊行された。この作品は7年前に雑誌《リナシメント (Rinascimento)》に連載されたもので、単行本化に際してダンヌンツィオは親友テンネッローニへの献辞を書き足して7ページが40ページに増えた。そこに彼は、クルスカ学会(1583年にフィレンツェで創設され、イタリア語の純化を目指す)の一会員との間のエピソードを挿入する。出会いの場面は、『クルスカ学会辞典 (Vocabolario degli Accademici della Crusca)』の編纂者の一人、アントン・マリーア・サルヴィーニの『トスカーナの散文 (Prose toscane)』(1715年)を引用しながら、次のように描かれる。

「神の栄光のため、我々は学会に仕えることによって聖ザノービ〔フィレンツェの守護聖人〕に仕えている […] もし貴殿が我々の言葉の最良の精華を集めるなら、聖ザノービに倣って、その御加護を受けられるよう、美德の最良の精華も集めることを願っている。」永遠の志願者 (candidato perpetuo) である私が、いかに一つの規則ともう一つの規則を守ってきたか、君は知っている。

その男はふるい分け機 (Frullone) の助手だった […] その役目は、袋を取り出し、その大きさ、重さ、詳細を台帳に登録した後、漏斗に注いで、揺すること。(PR: 2011)

サルヴィーニの引用「神の栄光 […] 願っている。」は、「言葉」と「美德」の両方が大切だということが主旨である。そこでダンヌンツィオは自らを「永遠の志願者」と定義して、「言葉」と「美德」の規則を守る努力を重ねてきた（そして「永遠」に重ねるだろう）ことを、親友テネッローニに確認する。「ふるい分け機」は小麦粉と<sup>ふすま</sup>麴を分離するために用いる木製の箱型の道具で、クルスカ学会の紋章である。この学会では製粉に関する用語が比喩的に用いられ、小麦粉は純粋な言葉、麴は不純な言葉を意味する。「最良の精華を集める (il più bel fior ne coglie)」は、ペトラルカの詩（『カンツォニエーレ (Canzoniere)』, 73 番）から取られた学会のモットーで、ここでの「精華 (fiore)」は小麦粉の厳選された部分のことである。

『クルスカ学会辞典』に引用されている「原典」蒐集の手伝いのために雇った、この学会員をダンヌンツィオは次のように描写する。

『辞書』に登録されている本以外に対して、何らかの重要性を付与することを彼は認めなかった。世界中の有名な図書館が火事になっても、学会の蔵書が無事であれば、彼は残念がらないだろう […]

私のいかなる本も彼にとって親しいものではないと思う。とはいえ、極めて優れた学会員たちの中にも、私より欲張りな言語研究家 (linguaio) を知らないということで、私に対して幾らかの賞讃を示した。(PR: 2012)

学会の閉鎖的な体質を揶揄しながら、ダンヌンツィオは自分の言語に関する特別な才能を誇示する。イタリア語にとってクルスカ学会が歴史的に重要な役割を果たしたことは事実だが、ダンヌンツィオはそれだけに固執することはしない。超然とした態度で、自分が奥義を極めたことを語る。

あの単純な小麦粉屋は、私の仕事が味見人のようなものと信じていた。小袋の口を開け、小麦粉の精華を手のひらに載せ、嗅いで、舐めて、味わい、最高と分かると、値段を付ける！ 友よ、私は自分の内側で、当時、魔術的な芸術の頂点に達していた。どんな時でも、どんな事物に関しても、いつでもすぐに秘密の魔法をかけることができた。(PR: 2014)

「当時」というのは『讃歌』を執筆していた約 10 年前のことで、ダンヌンツィオが詩人として最も充実していた時期である。その頃、彼は「魔法」のように、いとも簡単に、優れた作品を大量に生み出していた。「値段を付ける！」は、おそらく収入を得るということを意味するのだろう。このエピソードは「精華に至る、精華に至る！」(PR: 2026) という、最高に洗練された言葉を希求する、彼の内心の呟きで締め括られる。

献辞の加筆の他に、本の末尾に「認可 (Approvazioni)」と題する偽の証明書が付された。

クルスカ学会の検閲官と評議員の報告を受けて、会長が会員資格を認めるという内容で、実はダンヌンツィオ本人が文体を模倣して書いた。

我々、下部に署名した検閲官と評議員は、1705年の総会で定められた規定に従って、『コーラ・ディ・リエンツォの人生』と題された、騎士ガブリエーレ・ダンヌンツィオ殿の小品を吟味したところ、そこに言語の過誤を認めなかった。

上記の報告を受けて、件の小品を刊行する際に、騎士ガブリエーレ・ダンヌンツィオ殿がクルスカ学会の「永遠の志願者」という称号を用い、そして「未熟者 (Lo Immaturato)」と名乗る権利を与える。(PR: 2108)

献辞で用いた「永遠の志願者」という表現をここでも使い、更に学会の伝統に則って「未熟者」と自分にあだ名を付ける。時代遅れの学会を愚弄すると同時に、言葉に関して成熟がまだ十分ではないという自己への厳しさを持っていたのである。

## 第10章 『ルクレツィア・ブーティの第二の愛人』 ——トスカーナ語への執着、マンゾーニ派への反感

回想的随筆『鉄槌の火花 (*Le faville del maglio*)』の一つ、『ルクレツィア・ブーティの第二の愛人 (*Il secondo amante di Lucrezia Buti*)』は全て、1924年の5月から7月の間にヴィットリアーレ (ガルダ湖畔の彼の家) で書かれた。その背景には、10年以上の間、手元を離れていたカッポンチーナ (フィレンツェ近郊の彼の家) の蔵書が手元に戻ったという出来事がある。膨大な負債のために蔵書が差し押さえられて散逸する危機が迫った1912年2月、親友テンネッローニの尽力によって「ガブリエーレ・ダンヌンツィオ財団」が設立され、47箱分の本がローマに保管されることになった。第一次大戦とフィウーメ占領が終わり、ヴィットリアーレに住み始めてから少し経った1922年2月、諸般の理由によって30箱に減ったものの、念願の再会を果たす。前章で見たクルスカ学会員の助けを借りて蒐集した、『クルスカ学会辞典』の貴重な「引用本 (Citati)」は無事だった<sup>6)</sup>。その結果、文体はクルスカ学会風になり、さらにクルスカ学会への言及も多数ある。作品は1907年の時点から人生を回想するという設定で、次のように始まる。

私の中に幾つの心が宿るのか? [...] 私の中に多くの心、そして多くの民族が宿る。[...] 私がトスカーナ州プラートの寄宿学校に通うアブルッツォ州出身の生徒だった頃、[...] 私以上にトスカーナに同化した人がいるだろうか? 私はビゼンツィオ川 [プラートを流

れるアルノ川の支流]の水をごくごくと飲んだだけではなく、その砂利まで飲み込んだかのようにだった。(PR: 1207)

ダンヌンツィオは自分のアイデンティティーを主に近代統一国家のイタリアに置くが、ここでは「多くの民族」と多面性を仄めかす。現実の人生において、1910年にフランスに「亡命」してフランス語の作品を残し、1919-20年のフィウーメ占領でイタリア国軍から砲撃を受けた後に、この文章を書いている。おそらく彼の民族観に何らかの変化があったとはいえ、言葉に関してはトスカーナへの思い入れが変化しないばかりか、更に深まったようである。

トスカーナ語への執着について、11歳でプラートの寄宿学校へ入った時の苦い体験から説き起こす。

プラートの中学校の同級生たちの酷い愚弄が私の記憶によみがえる。初めて先生に当てられた私は起立して、薔薇(ròsa)という名詞を、まるで囁むという動詞の過去分詞[rósa]のように読み上げたのだ。その後、絶え間なく、誇り高く、発音の訓練をしたことが私の記憶によみがえる。それによって私は短期間で地元の方言の音を修正し、「美的な話し方」に関してシエナ出身のきざなライバルにまで勝つほどになった。(PR: 1208)

開母音òと閉母音óの違いという基礎からの出発にもかかわらず、トスカーナ州の古都シエナの出身者にも勝ったというのだから、その努力は並大抵ではなかっただろう。ダンヌンツィオの言語的な刻苦勉励の人生の出発点である。

彼のトスカーナ語の習得には幸運も微笑んだ。寄宿学校が休みの時、フィレンツェの市役所に勤める文献学愛好者の家に寓居したのである。クルスカ学会で活躍することを密かに願う家の主人との関係を次のように描く。

私の名文家としての道(maestria)の幸先の良い出発は、パラッツォ・ヴェッキオ[フィレンツェ市役所]に閉じ込められた、あの善良なクルスカ愛好者のおかげだと私は思う。「子供よ、いつでもクルスカ[麴]を手を持って文章を書く必要がある。」という格言を、記憶に残るクリスマス前夜の別れ際に、彼は私へ贈った。それに対して、純真に私は答えた。「ファリーナ[小麦粉]を持つ方が良いのではないですか? [...] 一体どうして、ファリーナではなく、クルスカという名前なののでしょうか? 最良の精華を集める。私は常に精華を手を持って文章を書くつもりです。」(PR: 1315-6)

格言の中の「クルスカ」は、もちろん『クルスカ学会辞典』のことだが、若きダンヌンツィオは言葉遊びをしながら、いかにも優等生らしい発言をする。しかしここには真実が含まれてお

り、彼は一貫して洗練された文体を追求して、実際に当代屈指の名文家となる。

また、寄宿学校の頃から既に、言葉の嗜好が明確であったことが、次の一節から分かる。

私はアルノ川で食器も服も濯がなかった。むしろ当時から私にとって、野暮ったくて小生意気なロンバルディーアの全ての濯ぎ屋（*risciacquatori*）は煩わしかった。[...] アルノ川は私にとって母なる泉であって、洗剤を流し落とす場所ではなかった。とはいえ、ファルテローナ [アルノ川の水源] の草原とブナ林が、何と私から遠かったことだろう。（PR: 1321）

「アルノ川で自分の服を濯ぐ（*risciacquare i propri panni in Arno*）」という慣用表現は、「自分の言葉を [アルノ川が流れる] フィレンツェの語法に合わせる」を意味する。これはロンバルディーア州の都ミラノ出身のマンゾーニが、代表作『婚約者』に施した作業である。彼は初版（1825-27年）を『クルスカ学会辞典』などに基づいて書いたが、結果に満足できず、自らフィレンツェに赴いて「日常語（*lingua d'uso*）」を体得して、完成版（1840-42年）を仕上げた。一方、ダンヌンツィオは「文語」を選び、語源（水源）を探り、都市よりもむしろ自然（草原とブナ林）を愛するのだから、両者の間に共感が生まれるはずがない。

また、この作品では過去への想いに交えて、自分の言葉に関する省察も述べられる。例えば、「私の芸術への讃辞（*Encomio della mia arte*）」という章では、ペトラルカを檜玉に挙げつつ、題名の通り自讃する。

アレツォの桂冠詩人が対話篇を書いたのは、自分自身の理解に達するために他ならない。[...] しかし彼には、言葉に対する官能的な愛（*l'amor sensuale della parola*）が欠けていた [...] 私の言葉は、反対に、私の本能のうちで最も強力なものとして備わっている。その肉体的な本能は、私の知性の白い炎によって浄化され強化されている。（PR: 1245-6）

「言葉に対する官能的な愛」は、ブラーツの有名な評論の題名だが、確かにダンヌンツィオの言語観を良く表わしている<sup>7)</sup>。精神と肉体、知性と本能、その片方しか中世のペトラルカには望めなかったが、ダンヌンツィオは両方を求めるのである。言葉は彼にとって「全て」であり、前章の『コーラ』の献辞では「魔法」と表現されたが、ここでは「錬金術」と見なされる。「ある日、我が友ジョヴァンニ・パスコリは [...] 慇懃に、ライバルの錬金術師の腹黒い微笑みを浮かべながら、私の錬金術の秘密を明かしてくれないかと私に請うた。」（PR: 1246）こうして彼の人生と芸術は、神秘的な合一の境地に達することになる。

私は生き、私は書く。連続する同じ神秘の中で、規則正しい同じ奇跡の中で、真似のでき

ない同じ遊戯の中で、私の血管が脈打ち、私の肺が呼吸をし、私のペンが文字を綴る。書くことは私にとって、息をすること、心臓が脈打つこと、地上の道の未知へと向かって歩むことの必要性和異ならない、秘密を明らかにすることの必要性、響き合うことの必要性である。書くことは私にとって、存在の深淵な法則に従うことである。(PR: 1428)

この一節は、ピランデッロが1920年9月2日にカターニアのペッリーニ劇場で、作家ジョヴァンニ・ヴェルガの80歳の誕生日を記念して行った講演の中で、ダンヌンツィオを名指しで非難して「人生は生きるか書くかのどちらかだ」(SI: 1011)と言ったのを受けて、書かれたと言われる。このような言語的な神秘思想をダンヌンツィオは、以後さらに深めて行くことになる。

## 第11章 『秘密の本』——言葉の神秘主義、言葉と人生の合一

自伝的作品『死に誘われるガブリエーレ・ダンヌンツィオの秘密の本の百と百と百と百のページ』(*Cento e cento e cento e cento pagine del libro segreto di Gabriele d'Annunzio tentato di morire*)は1935年にモンダドーリ社から出版された。表紙には弔意を示す黒い太線が引かれ、著者(厳密には編者)は架空のアンジェロ・コクレスとなっている。「死に誘われる」の背景には、1922年8月13日にヴィットリアーレの2階の窓から転落して頭蓋骨を骨折し、意識不明の深刻な状態が数日間続いたという事件がある。このため15日に予定されていたムッソリーニ、元首相ニッティとの三者会談がなくなり、10月28日のファシストによるクーデター「ローマ進軍」でダンヌンツィオの出る幕はなくなった。高齢にもなり、言葉で「行動」することがなくなった彼は、言葉は「表現」のためにあると言う。

表現するために生まれた私だが、今ほど連続して力強く表現したことは一度もなかった。

私は偉大な演説家だったのか？ 私は言葉を使って人々を動かし、状況を支配することができたか？ 今は長きにわたって私は沈黙したままだ。

私は言葉が交流(scambio)の手段だとは思えない。ウーゴ・フォスコロが「旅の言葉(linguaggio itinerario)」と呼ぶものを、もはや使用することができないように私には思われる。

研究、研究、研究、それによって私は名人(maestro)となり、表現し得ないものを表現することができる。そして私は自らの文体によって全ての時代の全ての文筆家を超越している。『アルキュオネー』の詩の最も繊細なものや最も強靱なものの中でさえ、最近の私の散文の調子の中ほど多くの神秘を含んではいない。そこに私が集めている魔術

(*Magia*) の謎と詩 (*Poesia*) のそれは異なるものではない。(PR: 1878)

自讃の調子は第8章の『散文選集』の辺りから顕著になり、「魔術」との同一視は第9章の『コーラ』の献辞に既にあった。自分の作品について語る作品という「メタ文学」において、創作能力が枯渇した作家の必然とも言えるだろう。なお、この一節は序の Migliorini (1990: 269) の講演でも引用され、言語学的な解説がなされる。

この珍しい言葉の探求の根底には、言葉というものを特別な精神から生まれた極めて繊細な精華 (*fiore*) であると見なす貴族的な考え方がある。[…]

言葉とは「交流 (*comunicazione*)」のためか、それとも「表現 (*espressione*)」のためか？ 当然、表現と詩人は結論を出す。普通の人は、旅での必要のために、幅広い交流を目指す。「表現し得ないものを表現すること」を目指す人は、それを気にかけない。珍しいという特質は作家にとって、美しさの一つの側面に他ならない。

貴族的に珍しく美しい言葉を探求したことはダンヌンツィオも自覚しており、『秘密の本』の中で次のようにやや諧謔的に述べる。

もし人文主義が人間を超越した (*di là dall'umano*) 人間 (本来ならば良く知られた別の言葉を書くところなのだが、飼育された尾長猿 (*cercopitechi domestici*) の使用と乱用によって気分が悪いので書かない) になるための技術に他ならないならば、[…] 私は至高の人文主義者である。[…] ギリシア、ラテン、イタリア、フランスの文学 (*Lettere*) によって我々に伝えられた知的、霊的な総体と、堅忍不拔の意志をもって交感しながら私は生きた。(PR: 1880)

「良く知られた別の言葉」とは「超人 (*superuomo*)」で、このニーチェ哲学の用語をイタリアに広めたのはダンヌンツィオ本人だったとはいえ、既に使い古されて「珍しく=美しく」ないのである。そこで「珍しい=美しい」言葉の例を挙げるごとく、俗人のことを「飼育された尾長猿」と呼ぶ。このように少しふざけながらも、「文字」とも訳すことのできる *Lettere* のおかげで自分が「聖人」の域に達していることを告白する。

芸術作品のように自分の人生を作ることを目指した彼の、それを成し遂げたという自負が、「遠い日の予感よ！ 柔和な詩人ジョヴァンニ・マッラーディへ捧げた私の若い頃の詩を読み返す時、何と私の心が高鳴り、様々な思いが脳裏をよぎることだろうか」(PR: 1915) という追憶に読み取られる。「若い頃の詩」とは、第2章の『ソネッティ』で、「詩こそ全て」の半行で終わる。そして彼が最後に到達した詩学とは、次のようなものであった。

リズムは——私が与える創造の動きという意味において——知性の彼方から生まれる。私たちが測ることも統べることもできない、あの私たちの秘密の深奥から立ち上がる。そして存在全体、つまり知性、感性、敏捷な筋肉、足取り、身振りへと伝わる。

この精神的なリズムは、伝統的な韻律学ではなく、私の自由な発想に従って、言葉を選び、そして並べるように教える。(PR: 1922)

これは「伝統」を追求し尽くした先の「自由」と言えるだろう。ダンヌンツィオは主として自分のアイデンティティーを政治的にはイタリア、言語的にはトスカーナに求めたが、この『秘密の本』において、自分の「人生＝生命 (vita)」のリズムに自分の言葉を合わせ、自分は自分なのだと認めることによって、より広く深い自由の世界を表現できたのではないだろうか。

## 結

本稿で幾度となく名前を挙げたカルドゥッチは、ダンヌンツィオの言葉と人生において特別な存在であった。文学に目覚めた時から、少なくともカルドゥッチが死ぬ時までは、その影を常に追い続けたと言える。

1879年5月6日、16歳のダンヌンツィオがプラートの寄宿学校からカルドゥッチへ初めて送った手紙は、「昨冬の夜にあなたの美しい詩を貪るように読み、心の奥底から賞讃し、新しく自由な愛情で私の心が強く脈打つのを感じました」(FL: 73) という一文から始まる。彼にとって、特に「新しく自由な」という部分が重要だったに違いない。というのは、「1692年にイエズス会によって創設され、イタリア統一後に世俗化された」彼の学校が、「そこを出た幾世代もの学生たちが恨みに満ちた呪詛の言葉と共に思い出す」(Guerri 2009: 13) ような場所だったからである。ダンヌンツィオは自らの決意をカルドゥッチに次のように伝える。

私はあなたの足跡を追いたいのです。人々によって新しいと見なされ、教会やマンゾーニ派とは全く異なる勝利をつかむ運命にある、この流派のために私も勇敢に戦いたいです。[...] 才能の最もまばゆい輝きを、生命の最も強い力を、私も真の芸術に捧げたいのです。(FL: 73)

ここでも「新しい」ということを強調しているのは、カルドゥッチの流派が「教会やマンゾーニ派」と違って自由だったからである。まず先に人生に関わる思想があって、次に芸術と言葉の問題が出てくる。その言葉と人生が実際に結び付くか否かは、運命にも左右されるものであり、ダンヌンツィオと違ってカルドゥッチの場合は遂に結び付かなかった。1860年、カルドゥッチは25歳でボローニャ大学の教授となり、劇場とも戦場とも無縁のまま、死の直前ま

でその教壇から離れなかった。

結局、両者の関係は余り恵まれたものではなかった。1911年7月30日、《コッリエーレ・デッラ・セーラ》(*Corriere della sera*)紙に掲載された『敵対する師匠について (*Di un maestro avverso*)』という『鉄槌の火花』の一つで、師弟の関係を清算する。

私は彼の知遇を得ることがほとんどなかった。私は彼をととても愛したが、彼の中にある激情と憂鬱の力ゆえに、それは哀しい愛だった。[...] 私は決して愛情の点で彼の近くにいることはなく、意見が一致していることもなく、いつも別の人種であり、別の次元にいると感じていた。私が彼を理解する術を知っていたとしても、彼は私を理解する能力を持っていなかった。(PR: 1569)

この文章には、カルドゥッチの死の翌日、つまり1907年2月17日という日付が末尾に付されている。自由の指導者が、いつからか、ダンヌンツィオにとって束縛になっていたのである。では一体、カルドゥッチが理解できなかったこととは何であろうか？ おそらく、演劇や演説によって直接に切り結ばれる大衆との新しい関係だと思われるが<sup>8)</sup>、それについては今後の研究課題としたい。

## 註

- 1) イタリアが統一して間もない1868年、教育相ブロッリオの発案で、あらゆる階層の人々にイタリア語を普及するため、国語審議会が設置された。その委員長を、小説『婚約者 (*I promessi sposi*)』で有名なマンゾーニ (1785-1873) が務め、「言語の統一とその普及の方法について」と題する報告書をまとめた。それを受けて、『フィレンツェの日常的用法に基づくイタリア語新辞典 (*Novo vocabolario della lingua italiana secondo l'uso di Firenze*)』の刊行が1870年に始まった。
- 2) Cfr. Coletti 1988.
- 3) Cfr. Coletti 1993.
- 4) この詩は、その後、『エポード (*Epodo*)』の題で詩集『イゾッテオ (*L'Isottèo*)』(1890年)の掉尾を飾った。
- 5) 「前書き」には、第3章の『死の勝利』の献辞からの引用もある。『死の勝利』の方は原文通りであるのに対して、第1章の新聞記事は若書きのためか、かなり修正されている。その結果、文章の主旨は変わることなく、表現はよりの確に、文体はより高雅になった。「散文において真の散文作家でありながら、カルドゥッチは自分の韻文を基にして——イメージの情熱的な動きと転換の滑らかさ、また極めて巧みな語の配置と常に高貴な音の調和を生み出しただけではなく——見事なラテン語的構文の頑丈な組み立てと入念な仕上げを行った。彼は散文においても卓越した設計者である。彼の文章の一つ一つを吟味してみなさい。そこにウィトルウィウスの模範的な建築と同じような、神聖なバランスが見出される。各部の照応は、ほとんど常に完璧である。」(PS: 5)
- 6) Cfr. Andreoli 1993.
- 7) Cfr. Praz 1982.
- 8) Cfr. Leso 1994, Melosi e Poli 2007.

## 文献一覧

【テキスト】

- Giosuè Carducci  
 GC *Tutte le poesie*, a cura di P. Gibellini, Roma, Newton Compton, 1998.  
 Gabriele D'Annunzio  
 FL *Il fiore delle lettere*, a cura di E. Ledda, Alessandria, Edizioni dell'Orso, 2004.  
 LT *Lettere ai Treves*, a cura di G. Oliva, Milano, Garzanti, 1999.  
 PR *Prose di ricerca*, a cura di A. Andreoli e G. Zanetti, 2 voll., Milano, Mondadori, 2005.  
 PS *Prose scelte*, a cura di P. Gibellini, Firenze, Giunti, 1995.  
 Rom. I *Prose di romanzi*, vol. I, a cura di A. Andreoli, Milano, Mondadori, 2005.  
 Rom. II *Prose di romanzi*, vol. II, a cura di N. Lorenzini, Milano, Mondadori, 2011.  
 SG I *Scritti giornalistici 1882-1888*, vol. I, a cura di A. Andreoli, Milano, Mondadori, 1996.  
 SG II *Scritti giornalistici 1889-1938*, vol. II, a cura di A. Andreoli, Milano, Mondadori, 2003.  
 Versi I *Versi d'amore e di gloria*, vol. I, a cura di A. Andreoli e N. Lorenzini, Milano, Mondadori, 2001.  
 Versi II *Versi d'amore e di gloria*, vol. II, a cura di A. Andreoli e N. Lorenzini, Milano, Mondadori, 1995.  
 Luigi Pirandello  
 SI *Saggi e interventi*, a cura di F. Taviani, Milano, Mondadori, 2006.

【参考文献】

- Andreoli A.  
 1993 *I libri segreti. Le Biblioteche di Gabriele d'Annunzio*, Roma, De Luca.  
 Coletti V.  
 1988 *Storia della lingua italiana*, in *Storia sociale e culturale d'Italia*, Milano, Bramante, v. 2 (*La letteratura, la lingua*), t. 2, pp. 407-531.  
 1993 *Storia dell'italiano letterario*, Torino, Einaudi.  
 Guerri G. B.  
 2009 *D'Annunzio. L'amante guerriero*, Milano, Mondadori.  
 Leso E.  
 1994 *Momenti di storia del linguaggio politico*, in *Storia della lingua italiana*, a cura di L. Serianni e P. Trifone, Torino, Einaudi, v. 2 (*Scritto e parlato*), pp. 703-755.  
 Melosi L. e Poli D. (a cura di)  
 2007 *La lingua del teatro fra d'Annunzio e Pirandello*, Macerata, EUM.  
 Migliorini B.  
 1990 *La lingua italiana nel Novecento*, Firenze, Le Lettere.  
 Praz M.  
 1982 *La carne, la morte e il diavolo nella letteratura romantica*, Firenze, Sansoni.

## D'Annunzio's cult of language:

Focusing on the relationship with Manzoni and Carducci

Kenichi UCHIDA

### Abstract

D'Annunzio's language, totally different from the "daily" language of the Manzoni School, was quite "literary". However, it also had an enormous impact on society, even producing a degenerate imitation, the so-called "dannunzianesimo". Therefore, this paper tries to show the true meaning of his language and its role in D'Annunzio's life by examining his own testimonies diachronically.

In the article *Giaufre Rudel* (1888), D'Annunzio praises Carducci's prose for its musicality and etymological correctness; in truth, these features are exactly his own ideals (chap. 1). In the romance *Il piacere* (1889), he declares the omnipotence of the word ("The verse is everything") and expresses his attachment to the Tuscan language (chap. 2). In the dedicatory letter of the romance *Trionfo della morte* (1894), D'Annunzio defines himself as a linguistic adventurer who aims to enhance the prestige of Italy through innovation in language (chap. 3). In the romance *Le vergini delle rocce* (1895), he indicates the tight connection of language to nationalism: here the word is considered not as a tool of fiction, but as a real "weapon" (chap. 4). In the lecture *Il tempio di Dante* (1900), D'Annunzio, the successor to Carducci as "bard", administers the cult of language (chap. 5). In the romance *Il fuoco* (1900), his art and life correspond perfectly, although in a fictional work: the word of a poet, like the gesture of a hero, is considered to be an "act" (chap. 6). In the poem *Maia* (1903), the word is praised as "mythical force of the stirps" through which the poet announces the arrival of a new era (chap. 7). D'Annunzio's sincerity toward language can be seen in the circumstances surrounding the publication of the prose anthology *Prose scelte* (1906), where his pride as a "master" of language appears in the preface (chap. 8). In the dedication of the biography *La vita di Cola di Rienzo* (1913), while mocking the Crusca Academy, D'Annunzio describes himself as a pursuer of the "flower" of language (chap. 9). In *Il secondo amante di Lucrezia Buti* (1924), an essay recalling his boarding school days in *Le faville del maglio*, D'Annunzio talks about his devotion to the Tuscan language and his antipathy to the Manzoni School (chap. 10). In the memoirs *Libro segreto* (1935), an aged D'Annunzio considers the word to be a means of "expression" rather than "communication"; his word and his life achieve a mystical union (chap. 11).

For D'Annunzio, Carducci was initially a leader, not only in language, but also of a new liberty; yet gradually he became a hindrance. After the death of his master in 1907, D'Annunzio sought to live his real life freely in the theatre and on the battlefield. There, he was able to express a broader and deeper world of freedom by matching the word to the rhythm of his life.

**Keywords:** Italian language, nationalism, Crusca Academy, Tuscan language, mysticism